

Reimagining Academic Libraries in Taiwan 中英對照演講稿（修訂版）

Slide 1 | INTERNATIONAL LECTURE

日本私立大学図書館協会の皆様、こんにちは。台湾の大学図書館における近年の発展と変革について、皆様と共有する機会をいただき、大変嬉しく思います。本日のテーマは「台湾の大学図書館の再構想：知識インフラから AI によるイノベーションの推進へ」です。

単に AI ツールについて語るのではなく、より根本的な問いについてお話ししたいと思います。それは、大学、学習のあり方、そして研究環境が変化する中で、大学図書館はどのような存在であるべきか、という点です。学習、研究、そして大学という組織全体、これら 3 つの側面から考察していきたいと思います。

Slide 2 | Roadmap

本日の講演は 6 つのパートで構成されています。まず、台湾の大学が現在直面している課題について簡潔に説明します。次に、こうした変化が大学図書館にどのような影響を及ぼしているかについて述べ、続いて AI 時代における図書館の価値を再考します。

続いて、台湾で現在進行中の変革事例を紹介し、今後の大学図書館が担うべき 3 つの戦略的役割を提示します。最後に、実際に

取り組むべき具体的なアクションと、台湾と日本の連携の可能性についてお話しします。

Slide 3 | 01 Key Challenges Facing Taiwanese Universities

まずは大学そのものに目を向けることから始めましょう。図書館は独立して存在するものではなく、大学を取り巻く環境の変化に伴い、図書館の役割も必然的に変わっていくからです。現在、台湾の大学が直面している最も顕著な状況としては、少子化、大学の役割や位置づけの再定義、そして AI がもたらす急速な変化が挙げられます。

Slide 4 | Five pressures are converging on universities

現在、大学が直面している課題を 5 つの点に整理しました。第一は人口動態です。学生数の減少と高齢化が進んでいます。第二は財政面です。特に授業料への依存度が高い大学にとって、学生募集の不振は収入に直結します。

第三は差別化です。学生数が減少する中、各大学は「自校の特色や使命とは何か」という問いに対し、より明確な答えを示す必要があります。第四は学習形態の変化であり、これにはハイブリッド型学習、生涯学習、そしてより柔軟な学習パスなどが含まれます。第五は AI です。AI はすでにカリキュラム、評価、学術的誠実さ、そしてガバナンスの領域にまで入り込んでいます。

したがって、このスライドで最も重要なメッセージは、「大学は変化しつつあり、図書館もまた、過去の前提に基づいて未来を構想することはもはやできない」ということです。

Slide 5 | Taiwan Higher Education: A Long-Term Demographic Challenge

まず、台湾の高等教育の規模を見てみましょう。2025 年時点で、高等教育機関は計 149 校あり、その内訳は公立 49 校、私立 100 校となっています。つまり、全体の約 3 分の 2 を私立大学が占めているのです。

この点は、日本の聴衆の皆様にとって特に注目すべきことかもしれません。台湾も日本と同様、私立の高等教育機関が大きな割合を占めているからです。学生募集の対象となる人口が減少する際、私立大学は通常、授業料収入や財政面での圧力をより直接的に受けることになります。したがって、少子化は単なる学生募集の問題にとどまらず、大学経営や図書館のリソース配分に関わる問題でもあるのです。

Slide 6 | First-Year Student Population

大学 1 年生の学生数

このグラフを見ると、長期的な傾向がより明確にわかります。大学 1 年生の数は、2020 年には約 22 万 9,000 人でしたが、2023 年には 19 万 5,000 人に減少し、2028 年には約 18 万 6,000 人になると予測されています。

2030 年には一時的に 22 万 1,000 人まで回復する可能性があります、これは特定の出生世代による短期的な反発に過ぎず、少子化の傾向が反転したことを意味するものではありません。2041 年には、1 年生の数は約 15 万 1,000 人になると予測されています。

したがって、単年度の増減だけに目を向けるのではなく、長期的な構造的縮小を捉える必要があります。図書館にとってこれは、将来的に、より限られたリソースを用いながら、より明確で、かつ人々の目に留まりやすい価値を創出していかなければならないことを意味しています。

Slide 7 | AI is not merely changing university technology; it is changing how universities teach, assess, govern, and define academic responsibility.

AI が変えるのは、大学における科学技術だけではなく、教育、評価方法、ガバナンス、そして学術的責任をも変えるのです。

人口動態に加え、AI もまた重要な変数となっています。AI が変えるのは、大学がどのような技術を利用するかという点だけではなく、教育方法、評価のあり方、ガバナンス、そして学術的責任の定義そのものをも変容させるものです。

例えば授業においては、学生が「AI を使って何を学ぶべきか」だけでなく、「AI について何を知るべきか」も問う必要があります。評価に関しては、AI が回答を生成で

きる状況下で、学生が実際に何を習得したのかをどう見極めるかが課題となります。学術的誠実さの面では、AI の利用をどのように開示・検証・明記すべきでしょうか。ガバナンスにおいては、誰が規範を策定し、リスクを管理し、責任を負うのでしょうか。

これらの問題は、情報センターや図書館だけで解決できるものではありませんが、図書館はその議論において重要な役割を担うべき存在です。

Slide 8 | 02 Key Challenges Facing Academic Libraries in Taiwan

台湾の大学図書館における重要な課題

台湾の大学図書館が直面する重要な課題には、関係者の関与が求められています。

続いて第 2 部に入ります。大学図書館は、それ自体どのような課題に直面しているのでしょうか。ここでは、「可視性（プレゼンス）」、「専門的能力」、「巨大プラットフォームへの依存」、そして「絶えず拡大する責務」という 4 つの点に焦点を当てたいと思います。

Slide 9 | Overview of Academic Libraries in Taiwan

台湾の学術図書館の現状概観

まず、台湾の大学図書館の現状を簡単に見てみましょう。台湾には 149 の高等教育機関があり、その大学図書館は依然として約 6,179 万冊の紙の資料を所蔵する一方で、

膨大なデジタルリソースも提供しています。

利用状況に目を向けると、紙の資料の貸出が減少し、デジタルリソースの利用が増加しているという長期的な傾向が明確に見て取れます。これに伴い、物理的な来館や従来の貸出サービスの重要性が低下している側面もありますが、それは図書館が利用されなくなったことを意味するわけではありません。利用のあり方が、徐々にオンラインやデジタル環境へと移行しているのです。

その一方で、台湾では早い段階からコンソーシアムによる共同購入、図書館間相互貸借、リソースの共有が進められてきました。そのため、「連携・協力」は常に台湾の大学図書館の重要な特色となっています。このスライドは現状の概観に過ぎませんが、後ほど、図書館がいかにしてさらなる変革を遂げようとしているかについてお話しします。

Slide 10 | Funding Strategies: Approaches to funding at national and private universities

財政戦略：国立大学と私立大学における財源と配分

財源に関しては、国立大学と私立大学でその条件は必ずしも同じではありません。国立大学には、政府からの運営費交付金（基本経費補助）、大学独自の基金、各種の国家プロジェクトによる資金があります。一方、私立大学は、「高等教育深耕計画」や

私学への助成金に加え、授業料、同窓会からの寄付、企業からの支援への依存度が高い傾向にあります。

私立大学にとって、少子化は直接的な圧力の連鎖をもたらしています。学生数の減少に伴い授業料収入が減少し、大学の予算が逼迫することで、図書館の予算も影響を受けやすくなるのです。

したがって、今後の図書館は単に「さらなる予算が必要だ」と訴えるだけでなく、自らへの投資がいかに学習・研究や大学の発展目標の達成に寄与しているかを、より明確に証明していく必要があります。

Slide 11 | Consortia and Strategic Alliances in Taiwan's Academic Libraries

大学図書館の連携と戦略的協力

予算やリソースの制約に直面する中、台湾の大学図書館は長年にわたり、連携を通じてその機能を拡大してきました。電子リソースに関しては共同での価格交渉や調達が行われ、物理的な資料や文献リソースについては NDDS や RapidILL といった図書館間でのリソース共有の仕組みが活用されています。また、地域や大学システム間では、1枚のカードで他大学の資料を借りたり返却したりできる相互利用サービスも展開されています。

こうした連携の意義は、単なる経費の節約にとどまりません。それは、現代の環境において、一つの図書館がすべてのリソースや専門能力を単独で保有することは困難であるという事実を私たちに示唆していま

す。今後は、「能力を共有すること」がこれまで以上に重要となるでしょう。

Slide 12 | Six forces are reshaping academic libraries

現在の運営環境を6つの力として整理しました。第一は人口動態や経済的な圧力、第二はAIが情報検索の主要な入り口となりつつあること、第三は検索・コンテンツプラットフォームの集約化が進んでいることです。

第四は「オープンサイエンス」であり、これにより図書館は研究資料の拡充、オープンアクセスへの対応、そして保存の責務を担うことになります。第五は政策や価値観に関わる要素で、権利、プライバシー、学術的誠実さ、公平なアクセスなどが含まれます。そして第六は「相互依存性」です。

最後の点は特に重要です。これらの圧力はそれぞれ独立したものではなく、互いに絡み合い、増幅し合っています。つまり、私たちが直面しているのは6つの個別の小さな問題ではなく、学術情報環境そのものの変容なのです。

Slide 13 | A highly digital library can become less visible

ここで興味深いパラドックスが生じています。図書館のデジタル化が進めば進むほど、かえって利用者の目には留まりにくくなる可能性があるのです。

今日、多くの学生や研究者は、まず図書館のウェブサイトを訪れるのではなく、

Google や出版社のプラットフォームを利用したり、直接生成 AI を使ったりしています。しかし、その背後にある知識リソースの多くは、依然として図書館が費用を支払って購入し、利用許諾を得て、体系的に整理し、長期保存しているものなのです。

つまり問題は、図書館が「利用されていない」ことではなく、図書館の価値が見えにくくなっているという点にあります。だからこそ、私は後ほど強調することになります——図書館は、自らの価値を改めて可視化しなければならない、と。

Slide 14 | Responsibilities expand while staffing capacity tightens

もう一つの課題は人的リソースです。取材、資料の解釈、資料の利用・保存といった従来の業務がなくなるわけではありません。しかし、AI リテラシー、調査資料の扱い、エビデンスの統合、権利・プライバシー、AI の評価など、新たな業務が増え続けています。

真の難しさは、こうした新しい分野ごとに専門家を雇用できる図書館がほとんどないという点にあります。したがって、今後の人的リソース戦略においては、単に「人員を増やす」のではなく、司書の能力をいかに再構築するか、部門間や図書館間でいかに連携・共有を図りながら専門的人材を活用していくか、といった点を検討する必要があります。

Slide 15 | 03 The Value of Academic Libraries in the AI Era

これまでは課題についてお話ししてきましたが、次に、より重要な問題へと話を移したいと思います。それは、「AI 時代において、大学図書館の真の価値とは何か」という点です。この部分は、本講演の核心にあたるものです。

Slide 16 | What must the academic library become?

高等教育の規模が縮小し、AI が情報検索の主要な入り口となる中、私たちは問い直さなければなりません。未来の大学図書館はどのような存在であるべきなのでしょう。

その答えは、単にチャットボットを導入することではないと私は考えます。もちろん図書館も AI を活用できますが、より重要な役割は、学習や研究、そして大学という組織のレジリエンス（回復力・強靱さ）を支える、信頼できる「知識インフラ」となることです。

つまり、ChatGPT と回答の速さを競うのではなく、AI だけでは必ずしも保証できないもの——信頼できる証拠、権利の管理、長期保存、そして専門的な判断——を提供することこそが求められているのです。

Slide 17 | Library value is shifting from transactions to processes

これは、図書館の価値を測る指標が変化しつつあることを意味しています。かつては、検索、貸出、データベース利用といった「単発の利用」をもってサービスの成果

を測るのが一般的でした。こうした指標は今でも有用ですが、それだけでは不十分です。

今後は、学生の学習プロセスや研究者の研究フローに図書館が入り込めているか、そして、追跡可能な「証拠の連鎖（エビデンス・チェーン）」の構築を支援できているかどうか、より重要になります。

つまり、図書館の価値は「個別の取引（単発的なサービス）」から、「学習や研究のワークフローへの統合」へと移行しつつあるのです。「答えを提供する」存在から、「知識の信頼性を担保する条件を守る」存在へと変わろうとしているのです。

Slide 18 | Three pillars of trustworthy knowledge infrastructure

私は「信頼できる知識インフラ」を3つの柱に分類しています。第一は「エビデンス（信頼できる証拠）」です。情報の出所を追跡可能にし、検索を可能な限り網羅的に行うこと、文献が撤回されていないかを確認できること、そしてデータの出所や経緯を検証できることが求められます。

第二は「インフラ」です。これには、利用権限、プライバシー、システム間の相互運用性、そしてサービスの継続性が含まれます。第三は「ケイパビリティ（能力）」、すなわち人の専門的能力です。具体的には、AI リテラシー、研究手法、公平なサポート、そして専門的な判断力が挙げられます。

これら3つの柱は、どれ一つとして欠かすことができません。技術があっても信頼できる証拠がなければ不十分ですし、リソースがあっても人の判断がなければ、やはり不十分なのです。

Slide 19 | The library should not compete with general-purpose AI

したがって、図書館が汎用型 AI と正面から競合する必要はないと考えます。AI は、スピード、統合、規模、そして利便性に長けています。一方、図書館が守るべきは、証拠、権利、知識の記憶、持続可能性、そして共有された専門性です。

ここで特に強調したいのは、図書館の価値はもはや個々の検索対応にあるのではなく、大学全体の知識環境そのものにあるということです。

ですから、私たちが目指すべき方向は「新たなチャットボットを作ること」ではなく、信頼できる知識インフラを構築することなのです。

Slide 20 | Services must move upstream in the research lifecycle

この概念は、研究支援の文脈において特に明確に示されています。従来、図書館は主に研究者が文献を探す段階、すなわち「ディスカバリー（発見）」の段階で関与してきました。しかし今後は、研究ライフサイクルのより上流および下流の段階へとその役割を広げていくべきです。

研究の開始前には、リサーチ・クエスションの定義、既存の知見の整理（エビデンスの棚卸し）、データ管理計画の策定を支援できます。研究の実施中には、再現性のある検索記録の作成、権利やプライバシーへの配慮、研究データの記録などをサポート可能です。そして研究完了後には、オープンアクセス化、データの保存、研究の可視性向上を支援できます。

これは図書館が研究者に取って代わることを意味するものではありません。より早い段階から関与することで、研究ライフサイクル全体を通じて、より戦略的な価値を発揮できるようになるのです。

Slide 21 | 04 Transformation of Academic Libraries in Taiwan in the AI Era

これまでに価値提案を確立しましたので、続いて第4部に入ります。台湾の大学図書館は、実際にはどのように変革を進めているのでしょうか。いくつかの事例を挙げて説明しますが、この変革は単にAIを導入することにとどまらず、プラットフォーム、業務プロセス、サービス、そして専門職としての役割が一体となって変化していくものです。

Slide 22 | Academic Libraries in Taiwan Are Transforming at Three Levels

現在の変革を、3つの階層に整理しました。第一はバックエンドの業務プロセスで、メタデータ、資料の調達・ライセンス許諾、分析などが含まれます。第二はフロントエンドのユーザー体験であり、情報の

発見、レファレンス・サービス、推薦、利用指導などが該当します。第三は組織ガバナンスで、エビデンス（根拠）、権利、データ、そして組織の記憶といった要素が含まれます。

これら3つの階層は極めて重要です。なぜなら、AIとは単に利用者の目に見えるチャット・インターフェースだけを指すものではないと、私たちに気づかせてくれるからです。真に根本的な変革は、多くの場合、バックエンドのプロセスや組織ガバナンスの領域で起こるものなのです。

Slide 23 | Migration to next-generation Library Services Platforms (LSP)

第一の根本的な転換は、次世代の図書館サービスプラットフォーム（LSP）の導入です。なぜLSPが重要なのでしょうか。それは、紙媒体と電子リソースのワークフローを統合し、クラウドベースで運用を行い、APIによるシステム連携や、分析・業務の自動化を支援できるからです。

さらに重要なのは、LSPがAIサービスの基盤インフラになりつつあるという点です。台湾でもすでに多くの大学が「Alma」などのプラットフォームを導入しています。

しかし、ここで強調しておきたいのは、プラットフォームの近代化それ自体が目的ではないということです。システムの入替えは「転換（トランスフォーメーション）」そのものではありません。真の目的

は、新しいインフラを活用してサービスを再設計することにあるのです。

Slide 24 | 20 TWAUG member libraries / institutions (2026)

このスライドには、台湾における Alma 利用グループのメンバーの一部が挙げられています。北部から中南部にかけて、国立・私立を問わず、多くの大学がこうした次世代型プラットフォームを導入、あるいはその取り組みに参加していることがわかります。

個々の大学について詳しく説明する必要はないでしょう。この図が真に示しているのは、LSP（図書館サービスプラットフォーム）の導入が、台湾において一部の大学による実験的な試みにとどまらず、利用者のコミュニティを形成しつつあるという点です。複数の大学が類似したプラットフォームを利用することで、経験や業務プロセスの設計、専門知識などを共有する機会も広がります。

Slide 25 | Alma and other LSP are embedding AI into core staff workflows

次の段階は、LSP（図書館サービスプラットフォーム）と AI の融合です。AI は、図書館員の主要な業務プロセスへと導入され始めています。

効率性の面では、メタデータ処理、データのバッチ補完、タイトルの照合などを支援します。対話の面では、自然言語による質問への対応や、役割・権限に応じた業務の実行が可能ですが、最終的な確認は人間が

行う仕組みが維持されます。分析の面では、傾向や異常の検知、意思決定の支援を行います。

ここでの重要なポイントは、「AI がすべてを自動的に完結させる」ことではなく、人間と AI の協働にあります。AI は処理のスピードと規模を担い、人間は確認、文脈の把握、そして専門的な判断を担うのです。

Slide 26 | Transformation of Academic Libraries and Other Examples of AI Applications

台湾における最初の事例として、台湾大学図書館の「SLIM」が挙げられます。同大学は 2025 年、統合検索システムに「AI Research Assistant」を導入しました。

利用者が自然言語で研究に関する質問を投げかけると、システムは関連する学術文献 5 件、AI が生成したトピックの概要、そしてさらなる探求のための質問を提示します。

この事例の意義は、情報探索のあり方が、従来の「キーワードを入力して検索結果のリストを得る」という形から、「AI-assisted research（AI 支援型研究探索）」へと移行し始めた点にあると考えます。もちろん、AI が生成した内容については利用者が検証を行う必要があり、情報の裏付けとなる一次文献を確認することも不可欠です。

Slide 27 | 2023 | — AI-powered reference & consultation AI 智慧館員「曉書」従

Reference 開始 2024 | AI Picks You — Personalized book recommendations

ここで公共図書館の事例を挙げたのは、AI サービスがいかに段階的に進化していくかを示す好例だからです。国立公共資訊図書館（台湾）では、2023 年に AI 司書「暁書（シャオシュー）」を導入して以来、2024 年にはパーソナライズされた図書選定機能へと発展し、2025 年には意味理解や自然言語による検索機能の実装、そして 2026 年には AI とデジタルコレクションを融合させた創作の場「PLUS Space」の展開へと進んでいます。

このように、「質問への回答」から「推薦（レコメンデーション）」へ、さらに「情報の発見」を経て、最終的には「創作」へと至る、明確な進化の道筋が見て取れます。

大学図書館の事例ではありませんが、AI サービスは単なるチャットボットにとどまる必要はないということを、この事例は私たちに示唆しています。

Slide 28 | Tamkang University Library: AI Across Front- and Back-Office Workflows

淡江大学図書館の事例は、AI がフロントエンドとバックエンドの双方で活用されているという点で非常に興味深いものです。

フロントエンドの「小書童（シャオシュートン）」は、自然言語処理を用いて利用者のニーズを把握し、24 時間体制で図書館に関する問い合わせに対応しています。一方、バックエンドの「AI 編目格格（AI ビ

エンムーグーグー）」は、欧州言語の図書の分類や目録作成を支援し、反復的な業務の負担を軽減しています。

つまり、この事例のポイントは、AI が利用者の目に触れるサービスだけでなく、図書館員の専門的な業務プロセスにも徐々に浸透しつつあるという点にあります。これは、将来的に図書館員に求められる能力をも変えていくことになるでしょう。

Slide 29 | CYCU Digital Humanities Hub: The Library as a Methods Laboratory

次に、中原大学図書館の「デジタル・ヒューマニティーズ・ラボ」についてご紹介します。この事例は、先ほど触れた AI コンサルティング・サービスとは少し異なり、チャットボットを中核とするものではありません。むしろ、図書館を「メソッド・ラボラトリー（研究手法の実験室）」と位置づけています。

ここでは、テキスト・データ分析、データの可視化、GIS（地理情報システム）や空間分析、AI やデジタル・クリエイション、AR/VR といった技術に加え、手法に関するコンサルティングやワークショップも提供されています。

ここで最も重要な変化は、図書館が単に「資料の所在」を案内するだけでなく、教員や学生が「どのような手法でその資料を分析し、新たな研究課題や知識を創出できるか」を考えるための支援を行うようになった点です。

つまり、図書館の役割は「リソースへのアクセス（資源の利用）」の提供から、「メソッド・サポート（研究手法の支援）」へと進化しているのです。これは、デジタル・学術サービスが必ずしも AI から始まる必要はないものの、AI やデータ分析、研究手法と統合され得るものであることを示しています。

Slide 30 | AI-Enabled Research Support and Service Innovation: Additional Examples AI 賦能研究支援與服務創新：其他案例

デジタル・ヒューマニティーズの手法による支援から、さらに研究支援や AI ガバナンスへと領域を広げる中で、陽明交通大学と成功大学という二つの異なる発展の方向性が見て取れます。

陽明交通大学は、Dataverse を活用して研究データの共有、保存、引用、ライセンス付与、発見、再利用を支援しています。同時に、「責任ある AI」や AI リテラシーの観点から、情報源の検証、AI 利用の開示、プライバシーや知的財産、そして研究者の責任を重視しています。これは、図書館の役割が単なる情報管理から、研究データや「責任ある AI」のガバナンスへと進化していることを示しています。

一方、成功大学は、AI を活用したサービスや研究のガイダンスに重点を置いています。生成 AI を既存の図書館サービスシステムと統合して、インテリジェントな相談対応やサービス案内を提供するとともに、Web of Science Research Assistant や

Scopus AI といったツールを活用し、文献探索、情報の統合、研究上の新たな発見を支援しています。

これら二つの事例を比較すると、図書館による研究支援が「データとガバナンス」および「AI による研究プロセスの支援」という二つの方向へ拡大していることがわかります。

Slide 31 | Emerging Roles of Academic Libraries in the Digital and AI Era 數位與 AI 時代大學圖書館的新興角色

これまでのスライドでは個別の事例を紹介してきましたが、それらを総合して見ると、大学図書館の「役割」そのものがどのように変化しているかがより明確になります。

研究データやオープンサイエンスの分野では、図書館員は単なる情報リソースの支援者から「リサーチ・データ・スチュワード（Research Data Steward）」へと変化しています。デジタル・アーカイブやデジタル・ヒューマニティーズの分野では、資料やコレクションの管理者から、「デジタル・スカラーシップおよび DH（デジタル・ヒューマニティーズ）のパートナー」へと役割を広げています。情報リテラシーの面でも、従来型の教育から AI や学術リテラシーへと対象が拡大しており、レファレンスや教育サービスも、デジタル・スカラーシップや学習支援へと発展しています。

ここで特に強調しておきたいのは、これが「新しい役割が古い役割に取って代わる」ということではない、という点です。資料収集、目録作成、コレクション管理、レファレンス・サービスといった業務は依然として重要です。真の変化とは、従来の専門性を基盤としつつ、データ、AI、研究方法、そして分野横断的な連携能力といった要素を新たに加味していくことにあります。

つまり、このスライドはこれまでの事例を総括するものであると同時に、次のテーマである「AI 導入から人間と AI の協働へ」へとつなぐ役割も果たしています。

Slide 32 | Taiwan's Academic Libraries in Transition: From AI Adoption to Human-AI Collaboration

これまでの事例を総合すると、台湾の大学図書館は現在、「AI の導入から、人間と AI の協働へ」と移行する段階にあると考えられます。

AI が拡張するのは、処理速度、規模、統合、自然言語による対話、パーソナライゼーション、そして自動化といった領域です。一方、図書館員が担う役割として増しているのは、情報源の検証、専門的な判断、文脈や倫理への配慮、権利やプライバシーの保護、そして品質の担保です。

したがって、真の変革とは「AI が図書館員に取って代わること」ではなく、人間と AI がそれぞれ最も適した業務を分担し直すことにあります。台湾の大学図書館もま

た、単なるリソースの提供にとどまらず、学習や研究のプロセスにより深く関与する存在へと、着実に変化しつつあります。

Slide 33 | Redefining the Academic Library: Three Strategic Roles for the Future

これまでは「現在起きていること」について見てきました。続く第 5 部では、事例紹介から未来のビジョンへと話題を移し、大学図書館がどのような存在であるべきかについて論じたいと思います。

私は、大学図書館が担うべき 3 つの戦略的役割として、「学習のパートナー」「研究のパートナー」、そして「機関のパートナー」を提案します。要するに、単なるサービス提供者から、大学にとっての戦略的パートナーへと進化するということです。

Slide 34 | What Should the Academic Library Become?

これら 3 つの役割は、それぞれ 3 つの動詞のセットで理解できます。「学習パートナー」は、資質・能力を構築し、学習に深く関与して学生の成功を促し、最終的に「有能な学習者 (capable learners)」を育成します。

「研究パートナー」は、研究の定義や実施を支援し、研究成果の普及と保存を促進することで、「信頼できる研究 (trustworthy research)」の実現を目指します。

そして「機関パートナー」は、知識を連携させ、知識と AI を統治 (ガバナンス)

し、組織の強靱性を強化することで、最終的に「強靱な組織（resilient institutions）」を形成します。

つまり、これら3つの役割は「人・研究・組織」という極めて明確な論理に基づいているのです。

Slide 35 | Building the Literacies for Learning in the AI Era

まずは「学習パートナー」という役割について考えてみましょう。これまで情報リテラシー教育は、情報の探し方やデータベースの利用法を教えることに重点を置いてきました。そうしたスキルは依然として重要ですが、AI時代においては、AIリテラシーやクリティカル・リテラシー（批判的リテラシー）を組み込むことが不可欠となっています。

さらに重要なのは、リテラシー教育を単発の図書館ワークショップにとどめるのではなく、カリキュラムや課題、探究学習、そして読み書きの活動の中に統合していく必要があるという点です。

究極の目標は、単に特定のデータベースやAIツールを使いこなせるようにすることではありません。AIが活用される環境下で、情報をいつ信頼し、いつ検証すべきかを判断しつつ、自ら学び、判断を下し、新たなものを創造できるようになることです。

Slide 36 | Supporting the Entire Research Lifecycle

3つ目の役割は「研究パートナー」です。ここでは、研究支援を「枠組みの構築（Frame）」、「実施と管理（Do and Manage）」、「共有と保存（Share and Preserve）」という3つの段階に分類しています。

最初の段階には、リサーチ・クエスションの定義、エビデンスの棚卸し、体系的な文献検索、データ管理計画の策定などが含まれます。実施段階では、テキストやデータの分析、研究データの管理、再現性のあるワークフローの確保、権利やプライバシー問題への対応、メタデータや研究記録の管理などを行います。そして最後の段階では、オープンアクセス、データの共有、永続的識別子、研究の可視性向上、長期保存などが対象となります。

その結果、図書館の役割は、単なる情報の発見・提供から、より信頼性が高く、再現性があり、持続可能な研究ライフサイクルを支援することへと変化しつつあります。

Slide 37 | Stewarding the University's Knowledge Infrastructure

3つ目は「機関パートナー（Institutional Partner）」という役割です。これは見落とされがちですが、将来的には極めて重要になると考えられます。

大学には、出版物、研究資料、学位論文、機関の記録、教員の研究情報などが存在しますが、こうした知識は往々にして異なるシステムに分散しています。図書館はそれらを統合・連携させ、権利、プライバシ

一、AI ガバナンス、来歴（プロベナンス）、アクセス・ポリシーを適切に管理・処理する役割を担うことができます。そして最終的には、保存、相互運用、情報の発見、再利用を通じて、それらを信頼できる「機関の資産」へと昇華させるのです。

このように知識が適切に構造化され、来歴が明確で、権利管理がなされていれば、将来的な AI 活用にも適したものとなります。これこそが、いわゆる「AI レディ（AI 活用に対応可能な）」な知識なのです。

Slide 38 | 06 Moving Forward: Strategic Priorities for Academic Libraries

3つの役割が定まった今、最後に答えるべき問いは、「ビジョンから行動へと、どのように移行するか」ということです。すべての図書館が必ず実行すべき理想論的なリストを提示するのではなく、各校の状況に合わせて段階的に進められる戦略をいくつか提案したいと思います。

Slide 39 | Three Strategic Priorities

優先すべき事項は3つあると考えます。第一に、「Make Value Visible（価値の可視化）」です。図書館が学習、研究、そして大学の目標達成にどのように貢献しているかを明確に示す必要があります。

第二に、「Embed in Workflows（業務プロセスへの組み込み）」です。単独のサービスを提供するにとどまらず、授業や研究、さらには大学の業務プロセスそのものに深く入り込むことが求められます。

第三に、「Build Shared Capacity（共有可能な能力の構築）」です。これには、図書館員の能力、信頼性の高いインフラ、そして大学間連携などが含まれます。

これら3つの要素は互いに関連し合っています。価値を可視化するには、中核となる業務プロセスに真に入り込む必要があり、そのためには十分な専門性と共有可能な能力が必要となるからです。

Slide 40 | One Future, Different Pathways

ただし、ここで特に強調しておきたいのは、すべての図書館が何もかもを行う必要はないということです。戦略は、大学のミッション（使命）に基づいて策定されるべきです。

研究型大学であれば、研究資料の整備、オープンサイエンス、AI ガバナンス、学術コミュニケーションの推進を優先するかもしれません。教育や学生を重視する大学では、学生の成功（スチューデント・サクセス）、カリキュラムとの統合、デジタル・リテラシーの向上を最優先事項に据えることができるでしょう。また、職業教育型や地域密着型の大学においては、産業関連情報、地域に関する知見、地域社会との連携、生涯学習といった要素がより重視される可能性があります。

つまり、目指すべき方向性は共有しつつも、そこに至る道筋まで完全に同じである必要はないのです。

Slide 41 | From Vision to Action: A Practical Roadmap

このスライドでは、取り組みを「NOW（現在）」「NEXT（次なる段階）」「TOGETHER（連携）」の3つの段階に分けています。

「NOW」は現状の把握と焦点の絞り込みです。現在どのようなAIを利用し、どのようなリスクがあるか、研究者が何を最も必要としているか、システムやデータがどこにあるか、そして図書館員のスキルにどのような不足があるかをまず確認します。

「NEXT」は試行と業務への組み込みです。一度に多くを手がけるのではなく、まずは価値の高いサービスを1~2つ選んで開始し、AIリテラシー、研究データ管理、システムの相互連携、図書館員の研修といった要素を、段階的に日常業務へと組み込んでいきます。

「TOGETHER」は共有と拡大です。AIに関するガイドライン、教育用モジュール、研究支援ネットワーク、共有プラットフォーム、そして大学間での専門能力開発の取り組みを共同で構築していきます。

私の提案は、一言で言えば「Start small. Embed what works. Scale through collaboration.」に集約されます。つまり、小さな規模から始め、有効な手法を日常業務に定着させ、連携を通じて規模を拡大していくということです。

Slide 42 | Moving Forward Together:
Taiwan-Japan Collaboration

最後に、台湾という枠組みを超え、台湾と日本の協力関係に目を向けたいと思います

す。両国の制度は異なりますが、直面している課題——少子化、AI、研究支援、そして人的・知的インフラの整備——は非常によく似ています。

協力のあり方として、3つのアプローチが考えられます。第一に「Learn Together（共に学ぶ）」です。AIリテラシーや研究データ管理、メタデータなどについて共に学びます。第二に「Build Together（共に築く）」です。ガイドラインや能力フレームワーク、研修リソース、そして信頼できるインフラを共同で構築します。第三に「Experiment Together（共に試行する）」です。AIサービスや研究支援モデル、機関横断的な知識発見などを共同で試行します。

置かれている状況は違っても、直面する課題は共通しています。協力し合うことで、私たちはより強固な能力を共に築き上げることができるはずです。

Slide 43 | WHEN AI MAKES ANSWERS ABUNDANT… 當 AI 讓答案變得無所不在…… TRUST BECOMES EVEN MORE IMPORTANT. 信任就變得更加重要。

最後に、本日の講演を次の一言で締めくくりたいと思います。「AIによって答えが至る所に存在するようになった今、信頼こそがより一層重要になっています」。

AIは迅速に答えを導き出せますが、答えの多さが必ずしも質の高い知識につながるとは限りません。したがって、大学図書館が今後担うべき核心的な役割は、AIとス

ピードを競うことではなく、信頼できる知識の基盤を守り抜くことにあります。

私たちは、学習のパートナーとして「有能な学習者」を育成し、研究のパートナーとして「信頼できる研究」を支援し、組織のパートナーとして「より強靱（レジリエント）な大学」の構築に貢献します。

ですから、本日の講演から3つの言葉だけを持ち帰っていただけるとすれば、それは「有能な学習者（Capable Learners）」、「信頼できる研究（Trustworthy Research）」、そして「強靱な大学（Resilient Institutions）」であってほしいと願っています。

ご清聴ありがとうございました。今後、台湾と日本の大学図書館の間で、さらなる交流と協力が生まれることを期待しております。